

日本語教育の立場から見た日本語と呉語の比較研究

ーガ行鼻濁音を中心に

黄 建 香

1. はじめに

近年、上海の一部のバスの車内放送がいつの間にか変わってきたことに気付いた。今まではバス停の名前などの情報を放送するときに、普通語（中国語「普通話」の訳語で、北京語をもととした標準語。以下同）に続いて英語の放送が流れていた。大都会の上海のことだから当然のことだろうと思われる。ところが、最近放送のリズムに変化が起こっている。普通語と英語の間に、前後の音声の勢いに及ばないが、柔らかな上海語の放送が挟まれるようになってきているのだ。改革開放の三十年間に、大都会のイメージをアップさせ、地元と国内外からの人材との交流を順調にさせるために、普通語がうまく話せない上海人に普通語の普及が課されてきた。効果が得られた一方で、若い世代が「母語」のはずの上海語が話せなくなったのも事実である。そのため、近年、地元のテレビ局は上海語しか使わない番組が多数制作され、地元の小学校でも上海語の教科書がすこし導入されるようになってきた。地方の言葉の使用意識と保護意識を喧伝していると捉えられよう。

一方、ガ行鼻濁音が日本語から消えようとしているといわれ久しいが、子音 ng を特徴のひとつとする呉語（呉方言とも言う）と日本語においてそれぞれ ng 音がどのような生態の中で使用されているのかについて比較考察し、日本語のガ行鼻濁音衰退を海外の日本語教育機関でどうとらえ、教育に反映させていくべきかということを提案したい。日本語と呉語という歴史的に影響関係があった二つの言語の未来についても検討したい。

「日本語の中に保存されている呉音と漢音の二種類の借用語から、今日になっても、隋唐時代に中国語の南北の言語差異を多少窺う事ができる。日本語訳呉音は 5、6 世紀の江蘇と浙江から、日本語訳漢音は 7、8 世紀の西北または長安から来たもので、二者の音声的特徴の痕跡が多少現代の呉方言と西北方言にも保存されているのである」¹と指摘されているとおり、現代日本語と現代呉語には古い呉音の特徴がまだ残っている。

中国には、古代日本の漢字音と呉音の関係について交流史の角度からの研究が若干ある²。音声の面から呉音や日本漢字音について比較研究をしたものとして『唐朝官話の研究』³は

数少ない先行研究の中の一つである。同書は客家語⁴の音声と日本語や韓国語、呉語などの音声との比較を通して、客家語と唐代の共通語の関係を明らかにすることを目的としているが、大量の字音をローマ字表記で収録したところが大いに参考になる。日本では矢野光治氏の「中国漢字音と呉音・漢音—中国漢字文化の奈良時代古典作品への影響」⁵などが挙げられる。ガ行鼻濁音の衰退現象についての研究は過去四十年間にわたって要因・地域差・使用意識・日本語教育など多方面からされてきた⁶。しかし、ガ行鼻濁音の行方をめぐって、受容関係を持つ日本語と呉語の〔ng-〕鼻音節の比較研究を通じて、日本語教育への示唆を探る研究は管見の限りあまりない。ガ行鼻濁音の衰退の歯車にブレーキをかけることはもはや遅いが、ガ行鼻濁音の日本語における重要性をもう一度喚起することができればというのが本論の目的である。

本論において字音の表記は分かりやすいローマ字で〔 〕に入れて記すことにした。ローマ字表記は呉語の母音を十分に記しきれないこともあるが、ここでは主に〔ng-〕という子音を考察するため、研究の結果には影響がないと考える。また、ローマ字表記が同じものであっても声調が違う場合があるが、声調とアクセントは本稿で検討しないため、一切記すことを略す。ガ行鼻濁音の子音を〔ɳ〕で表記するのもあるが、ここでは〔ng〕を用いて記す。また、日本語は東京方言をもととする標準語を研究対象とする。呉語は多数の地方方言を含んでいるため、本論では主に代表としての蘇州語と上海語を参考にする。二つの方言の語彙は音節が同じものが多いため、用例を挙げる際、上海語か蘇州語かを特に説明する必要以外は区別しない。筆者は蘇州地方の出身で、上海で二十年以上生活し、日本語教育に従事しており、本論で用いる用例はすべて自身の内省に基づくものである⁷。

2. 呉語の〔ng-〕音

2.1 「呉儂軟語」と評価される呉語

呉語は中国7大方言の中で北方方言に次ぐ2番目の方言で、上海をはじめ、浙江省、江蘇省南部、福建省の一部、安徽省の一部、江西省の一部など広範囲にわたって使用されている。歴史的には蘇州の言葉が呉語の標準語とされたが、現在では上海語を代表としている。呉語の発祥地は浙江と江蘇の南部を含めた、いわゆる江南の地域だ。福建、安徽、江西の呉語は移民による浙江と江蘇の言葉の広がりである。江蘇省の蘇州や浙江省の寧波からの移民によって造られた上海の町の言葉も諸方言が複雑に融合してできたものである。また、村Aと隣の村Bの言葉も違うように、細かく分化してできた呉の支方言は膨大な数になる。従って、呉語という命名は統一された方言ではなく、同じ語源を持つ、文法や発音が似た一群の方言の総称である。

上古期（紀元前 11 世紀—紀元 2 世紀）に形成された呉語が長い間、中原（中国の中心地とされていた黄河流域全体）の言葉の影響によってだんだん発展してきたのが現代呉語であり、現代と上古の呉語はかなり違っている。本来の呉語の様子は今の研究ではまだ把握されていない。普通、研究対象とされている呉語は中原の言葉の影響を受けたものである。呉語の第三人称の [i] が普通語の「伊 [yi]」と同じ語源を持つことを考えれば理解しやすい。

呉語と普通語の音声学における大きな違いというと、呉語には捲舌音（舌尖後音）がないこと、呉語が話されるほとんどの地方で、韻尾が [ng] 一つのみであること、短い入声子音 k（内破音で終る調子）があること、普通語の声調が 4 つしかないのに対して呉語は声調が 7、8 種もあること、及び鼻濁子音 [ŋ] があることなどが挙げられる。これらの発音上の特徴があることから、「呉儂軟語」（「呉儂」は呉の地方の異称）と評価される如く、呉語は北方方言の硬さに対して柔らかく、軽妙な聴覚効果がある。その柔らかさが春風のように頬をかすめ、水のように心の田を潤してくれると譬えられるほどである。

2.2 普通語の [ng] 音と呉語の [ŋ] 音

[ng-] の字音は古代の長安あたりの言葉や、さらに古い漢語に存在していた可能性は否定できないが、現代普通語にはないものである。普通語には「本 (ben)」「分 (fen)」などの前鼻音 [n] に対して、「崩 (beng)」「風 (feng)」などの後鼻音 [ŋ] がある。即ち、普通語の [ŋ] は子音の位置ではなく、漢字の韻尾にある。

普通語の前鼻音 [n] は呉語では発音しないことが普通だ。

便：	bian （普通語）	bie（呉語）	ben（ベン 日本語）
万：	man （普通語）	me/ve（呉語）	man/ban（マン/バン 日本語）

普通語の後鼻音 [ŋ] は呉語では保持されている。

硬	ying（普通語）	ngang（呉語）	kou（コウ 日本語）
争	zheng（普通語）	tsang/tzeng（呉語）	sou（ソウ 日本語）

ここでは前鼻音と後鼻音の漢字を二つずつしか例に挙げていないが、ほかの多くの例を考察してみると、前鼻音の場合、呉語では鼻音を発音しないことに対して、日本語では保持している。一方、後鼻音の場合は、呉語は鼻音を保持しているが、日本語は長音に置き換わっているということがわかった。『新明解漢和辞典』で、「漢字音は古く伝わったものではあるが、発音の難易によって多少転化している。たとえば鼻音 (ng) は長音 (o) に変化したといわれている」⁸と指摘されている。即ち、漢字の韻尾の ng が日本語では難しくて長音に音便化されていると理解できる。

ここでは呉語の音声上の特徴である子音 [ŋ] の実態にしぼって分析する。まず、人称

や呼称のような日常用語における鼻音 [ng] の使用状況について、蘇州語と上海語の用例を以って説明すると次のようになる。

表 1 呉語における [ng] 使用状況

		蘇州語	上海語
第一人称	単数	我 [ngou] 奴 [nou]	[ngu]
	複数	[ngou ni] [ngou li] [ni]	[a la] [ni] [ngu ni]
第二人称	単数	[ne]	[nong]
	複数	[ne to]	[na]
第三人称	単数	[li] [ngto]	[i]
	複数	[li to]	[i la]

以上の表 1 で示しているように、鼻音 [ng] は三つの人称ともに出ている。子音の位置にも韻尾にも出ることがある。[ng] の使用率が高いことがわかる。

次に、呉語の子音 [ng] を分類して見ていく。用例は一部の常用語で、日本語の話者にとって分かりにくい言葉は（ ）に意味を入れる。

(1) [ng] を一字音として用いる。

五 [ng] 魚 [ng] 端午 [ng] 囡女 [ng] (娘)

(2) 子音 [ng] + 母音 [a] ・ [u] ・ [e] ・ [o]

外 [nga] 牙 [nga] 芽 [nga]

我 [ngu] 餓 [ngu] 鶯 [ngu] 臥 [ngu]

眼 [nge] 呆 [nge] 挨 [nge] 癌 [nge]

咬 [ngo] 傲 [ngo] 熬 [ngo] (我慢する)

この一群の音は日本語にもある。

(3) 子音 [ng] + 日本語にない母音

我 [ngou] 硬 [ngang] 岳 [nguo] 岸 [ngue] ([nguɔ] と同) 額 [ngak] 魚 [ngei]

この部分の字音は日本語にないもので、現在の日本語の音節で替えることはできない。ここの「額」の読み方と (2) の「牙」の読み方の違いは「額」に入声子音 [k] があるところである。(1) の魚 [ng] は上海語で、(3) の魚 [ngei] (上海からすこし離れた崇明の方言) の音便型と考えてよい。

(4)

『唐朝官話の研究』によれば呉語で〔ng-〕音を持つ字の数は約 50 である。さらに、〔ng-〕は「漢字音の中で最も発音しにくい部分だ」⁹と述べられている。発音の難しさが指摘されているが、人称などの日常用語にたくさん用いられているところから呉の地方の人にとっては個別の音節以外は決して難しくない。

2.3 呉語の〔ng-〕音と〔g-〕音の比較

呉語で〔g-〕と〔ng -〕の互換はあまりないようだ。日本語のガ行のような条件異音もない。〔g-〕音の字として、最もよく出ている「猗〔ge〕」（指示詞の一つ）や「共〔gong〕」、「鱣〔gang〕」（馬鹿）の〔g〕は濁音で、〔ng〕と置き換えはできない。

また、〔ngi〕の音節が呉語にあまり使われていないことは呉語と日本語の比較研究の分野では注意すべきところである。〔ngi〕は『現代呉語の研究』や『北部呉語研究』、『上海市区方言志』¹⁰などではほとんど用例が収録されていない。さらに濁音〔gi〕も蘇州語と上海語にはない。中心地の蘇州と上海から離れた、常熟や崇明など少数の地方の方言に「其〔gi〕」（第三人称の単数）およびそれから分化した〔ge〕がまだ使われている。現在では〔gi〕音の語がわずかしかなかったが、「其〔gi〕」の存在が呉語にまだ〔gi〕音があることを説明する貴重な例である。これに対して、中原の古音を保存していると言われている客家語には〔ngi〕と〔gi〕の両方ともあるようである。『唐朝官話の研究』によれば、客家語の「芸」・「疑」・「義」の字音は〔ngi〕で、「撃」・「急」・「吉」の字音は〔gi〕となっている。「其〔gi〕」は同書に収録されていない。客家語にも日本語にも〔ngi〕と〔gi〕が多いことから古代の呉語にも〔ngi〕と〔gi〕がたくさんあったと推測できる。〔ngi〕の発音が難しかったためか、「芸」・「疑」・「義」の字音は現代呉語ではほとんど〔ni〕になっている。「撃」・「急」・「吉」の字音は〔jerk〕である。

呉語の鼻音〔ng-〕の使用状況は以上の通りである。〔ng〕または〔ngu〕と読む「呉」の字音が象徴しているように、語頭の〔ng-〕が呉語の特徴の一つである。それと声調の多さ及び捲舌音がないこととともに、呉語の柔らかい音声的特徴をなしている。呉の地方の人々の温和な性格は柔らかな呉語のおかげだといわれているが、さらに蘇州の評彈、浙江の越劇、安徽の黄梅戲、上海の滬劇、昆山の昆劇など柔らかくて美しい地方劇を数多く生み出した。

3. 日本語のガ行鼻濁音の変遷

3.1 ガ行鼻濁音の使用状況

ガ行鼻濁音は東京を中心とした東日本や京都・大阪を中心とした近畿地方の発音に見られる。その子音は呉語の ng と同じ軟口蓋鼻音である。それを指摘した文献は 1604 年から

日本で刊行された、ポルトガルの宣教師ロドリゲスが書いた『日本大文典』に遡ることができる。同書の「アクセント及び発音上の誤謬」の節で、「ある語は一種半分の鼻音或いはソソネーテをとるのであるが、それをN又は明白な鼻音に変へてはならない¹¹」というふうに一部の鼻濁音の発音を指導している。さらに、「科」を「Tonga（とんが）」、「われらが」を「Vareranga（われらんが）」、「長崎」を「Nangasaqui（なんがさき）」と読むように例示している。挙げられた例は語中に「が」のある言葉だけであるが、「ぎ」・「ぐ」などの場合もそうだっただろう。

ガ行鼻濁音の現状を見れば、近年、若者の中で使いこなせない人が増えているため、小中学校の国語教育では学習内容に含まれていなくなったと言う。代わりに濁音と鼻音の中間位置にある摩擦音で読まれている。ガ行の摩擦音は濁音のほうに近いので、以下、便宜上、摩擦音という言い方を取らず、濁音を用語として用いる。学校でガ行鼻濁音を教えないといっても、実際は職業等によって発音の差異があるのが現状である。「アナウンサーの生育地がガ行鼻濁音を使用していない地域の場合であっても、指導者の立場であればガ行鼻濁音を使用するよう指導する」¹²ことから、標準的であることと美意識が求められるアナウンサーの放送音声は伝統に従ったものであるのが分かる。また、人によって、鼻濁音だったり濁音だったりという現象も起きている。一例を挙げれば、井上あずみ氏が歌った「君をのせて」の歌では接続助詞「が」は鼻濁音で、「輝く」の「が」は濁音となっている。これらの違いは学習者からよく質問される問題でもある。

長い間、ガ行の発音は条件異音として指導されてきた。つまり、文節の頭に来る場合、濁音となり、それ以外の位置には鼻濁音となるのが原則であった。例えば、「呉語（ごご）」の音声は[go ngo]である。ガ行の鼻音のほかに、撥音「ン」の基本音も鼻音 ng である。

3.2 ガ行音対照分析

北方方言の代表である北京語を基準とする普通語は主に中原の言葉から発展してきたもので、ある程度日本語の漢音を反映している。呉語はある程度日本語の呉音を反映している。それで、ガ行の音声の変遷を把握するために日本語と普通語と呉語の音声の対照分析をすることにした。ガ行の音節は「次ぎ」「直ぐ」などの和語にも、「現実」「午後」などの漢語にも用いられている。ここでは漢字の読み方におけるガ行の使用状況のみを調べてみた。古代の字音を復元することができないので、現代の日本語と普通語と呉語を用いて比較する。比較の前提は日本語の漢字音が主として呉音や漢音から来ているということである。『新漢和辞典』には八千字以上漢字が取られているが、全部考察するのは不可能だと考え、『三省堂国語辞典』の後ろに記載されている「常用漢字音訓一覧」に纏められた漢字だけでも十分に現象を説明できるから、こちらを考察することにした。その中から音読みに

ガ行音のあるものをすべて抜き出し、法則を見つけるために、普通語の漢字音を基準に、日本語、普通語、呉語の漢字音の対照表を作成した。日本語読みは『三省堂国語辞典』の音読みを取った。現在使っている音読みが漢音か呉音かということを知るために『新漢和辞典』で確認した。漢音であるものは（ ）に「漢」を入れ、呉音であるものは（ ）に「呉」を入れ、漢音と呉音が同じものは（ ）に「同」を入れ、漢音でも呉音でもない慣用音は（ ）に「慣」を入れることにした。

表 2（普通語で母音だけの漢字）4 字

漢 字	餓	額	岸	偶
日本語	ガ（同） ga	ガク（漢） gaku	ガン（同） gan	グウ（慣） guu
普通語	e	e	an	ou
呉 語	ngu	ngak	nger	ngou

表 2 の 4 字の呉語は [ng-] 音で、日本語の読み方が本来鼻濁音だった可能性が高い。

表 3（子音 g の漢字）4 字

漢 字	該	概	剛	宮
日本語	ガイ（慣） gai	ガイ（慣） gai	ゴウ（慣） gou	グウ（慣） guu
普通語	gai	gai	gang	gong
呉 語	gai	gai	gang	gong

表 3 の子音 g の 4 つの漢字は三者とも濁音で子音の変化が見られない。

表 4（子音 h の漢字）13 字

漢 字	画	賀	効	害	含	行	幻	互	後	護	号	豪	合
日本語	ガ（慣） ga	ガ ga	ガイ gai	ガイ gai	ガン gan	ギョウ gyou	ゲン gen	ゴ go	ゴ go	ゴ go	ゴウ gou	ゴウ gou	ゴウ gou
普通語	hua	he	he	hai	han	hang	huan	hu	hou	hu	hao	hao	he
呉語	ho	hu	he	hai	her	hang	hue	hu	hou	hu	hor	hor	he

表 4 の子音 h の 13 の漢字の場合、日本語読みは「画」以外は全部呉音である。普通語と呉語は音声の表記が似ているが、実際の発音は大きく変っている。呉語では子音 h は普通語と英語（例えば he）のような強い有気音でなく、有気鼻音であり、発音するとき、子音 h がほぼ脱落しており、喉の後部からの発声で母音に近い音になる。従って、本来、日本

語読みは鼻濁音だっただろうと推測できる。

表 5 (子音 j の漢字) 12 字

漢字	街	技	具	軍	郡	解	鯨	劇	撃	激	減	極
日本語	ガイ (慣) gai	ギ (呉) gi	グ (呉) gu	グン (慣) gun	グン (呉) gun	ゲ (呉) ge	ゲイ (慣) gei	ゲキ (慣) geki	ゲキ (慣) geki	ゲキ (慣) geki	ゲン (慣) gen	ゴク (呉) goku
普通語	jie	ji	ju	jun	jun	jie	jing	ju	ji	ji	jian	ji
呉語	ka	ji	ju	jun	jun	kak	jing	jia	jierk	jierk	ge	jie

表 5 の子音 j の 12 の漢字は「街・解・減」の 3 つ以外、普通語と呉語は似ているが、日本語は j 音ではない。日本語読みは呉音と慣用音から来ている。呉語の「減」は韻尾「n」が脱落している。「解・街」の 2 つは呉語の無気音から日本語の濁音に変化したと推測できる。この表にはないが、普通語の「家 (jia)・甲 (jia)・江 (jiang)」などの字音が呉語では「家 (ka)・甲 (ka)・江 (kang)」となるように、子音「j」が無気音「k」になる傾向があったのだろう。さらに無気音「k」から日本語の「g」になったと考えられる。この部分の日本語読みは昔も濁音だっただろう。

表 6 (子音 k の漢字) 2 字

漢字	慨	拷
日本語	ガイ (慣) gai	ゴウ (慣) gou
普通語	kai	kao
呉語	kei	kao

表 6 の子音 k の漢字は 2 つだけだ。[k-] 音はほとんど「開 (普 kai・日 kai・呉 ke)」・「空 (普 kong・日 kuu・呉 koŋ)」のように同じ清音 [k-] だが、同表の「慨」・「拷」は例外で、恐らく無気音 k から濁音 g になっただろう。

表 7 (子音 n の漢字) 5 字

漢字	擬	逆	虐	牛	凝
日本語	ギ (同) gi	ギャク (呉) gyaku	ギャク (呉) gyaku	ギユウ (漢) gyuu	ギョウ (漢) gyou
普通語	ni	ni	nue	niu	ning
呉語	ni	nierk	niak	niu	nin

表7の子音 n の5つの漢字の場合、普通語と呉語は子音が同じ n で、日本語は g となっている。n 音と ng 音が似ていることから、本来、日本語では [ng-] だったのではないだろうか。日本語の読み方から、古い呉語では鼻音に近かったと推測できよう。中古の一部の [ng-] の字音が現代呉語では [n-] に、日本語では [g-] に分化していった現象を反映していると思われる。また、「牛」・「凝」の字音が漢音であることから漢音にも鼻濁音が存在していただろうと推測できる。

表8（子音 q の漢字）4 字

漢 字	欺	群	碁	強
日本語	ギ (慣) gi	グン (呉) gun	ゴ (慣) go	ゴウ (呉) gou
普通語	qi	qun	qi	qiang
呉 語	tʃ i	dʒ ing	dʒ i	tʃ ang/dʒ ang

表8の子音 q の4つの漢字の場合、普通語と呉語は似ており、日本語は濁音化している。日本語の読みから逆に古い呉語の読み方を推測できる。表にはないが、2.3 で触れた普通語の「其 qi」を上海付近の崇明語では gi と言うのがその残りだ。

表9（子音 w の漢字）10 字

漢 字	我	外	丸	頑	偽	五	午	呉	悟	誤
日本語	ガ ga	ガイ (漢) gai	ガン gan	ガン gan	ギ gi	ゴ go	ゴ go	ゴ go	ゴ go	ゴ go
普通語	wo	wai	wan	wan	wei	wu	wu	wu	wu	wu
呉 語	ngu/ngou/nou	nga	ue	uai	wei	ng	wu/ng	wu/ng	ngu	ngu

表9の子音 w の10の漢字の場合、「外」以外、漢音と呉音が全部同じである。普通語の [w-] 音は呉語では鼻音化する傾向がある。鼻濁音から現在の日本語の濁音に変化したと考えられる。

表10（子音 x の漢字）11 字

漢 字	学	犧	戲	形	曉	下	現	弦	限	玄	郷
日本語	ガク gaku	ギ gi	ギ gi	ギョウ gyou	ギョウ gyou	ゲ ge	ゲン gen	ゲン gen	ゲン gen	ゲン gen	ゴウ gou
普通語	xue	xi	xi	xing	xiao	xia	xian	xian	xian	xuan	xiang
呉 語	hok	xi	xi	ing	xiao	ho	ie	ie	hai	ie	xiang

表 10 の子音 x の 11 の漢字の日本語読みは全部呉音である。現代の呉語では普通語と同じように x とする場合が多い。「学」「下」などは昔のままの読み方である。古代の x は呉語では無気 h に転化したようだ。今日の「香港」の「香（ホン）」の読み方は広東話から来たもので、呉語から広がった字音を保存している例である。x 子音の変化を次のように示すことができる。

[x -] (漢語) → 無気 [h -] (古い呉語) → 鼻音 [ng -] (古い日本語) → 濁音 [g -] (現代日本語)

表 11 (子音 y の漢字) 36 字 (雅・芽・涯・岳・楽・岩・眼・願・顔・宜・義・疑・儀・議・御・魚・漁・仰・業・玉・銀・吟・愚・遇・隅・芸・迎・月・元・言・原・源・巖・娛・語・獄の 36 字があるが、普通語で同じ音の字を一部略して、以下の 16 字を取り上げた)

漢字	雅	岳	楽	岩	愚	魚	宜	芸	迎	銀	御	仰	業	玉
日本語	ガ ga	ガク gaku	ガク gaku	ガン gan	グ gu	ギョ gyo	ギ(同) gi	ゲイ gei	ゲイ gei	ギン gin	ギョ(漢) /ゴ(呉) go/gyo	ギョウ gyou	ゴウ(漢) /ギョウ(呉) gou/gyou	ギョク gyoku
普通語	ya	yue	yue	yan	yū	yū	yi	yi	ying	yin	yū	yang	ye	yu
呉語	ia	ngok	iok	nge	yū	ng/ngai	i/ni	i/ni	ning	nin	nū	iang	nie	niok

表 11 の子音 y の漢字の数は最も多くて、36 にのぼる。「宜」「御」などの漢字以外、日本語読みはほとんど漢音である。子音 y の漢字が呉語では鼻音で読まれるものが多いから、鼻音から日本語の濁音に変化したのだろう。また、漢音から来たものが多いことから、古代の漢音に鼻濁音が存在していただろうと推測できる。

以上の比較を通して、表 2 は別として、普通語の漢字の子音が g・h・j・k・n・q・w・x・y の場合、日本語ではガ行濁音化する傾向があり、特に y 子音の漢字でガ行濁音化したものが多い。考察した漢字は全部で 101 字で、日本語で本来濁音で発音したであろうものは 22 字で、鼻音で発音したであろうものは 79 字もある。鼻音は濁音の約 3.5 倍である。

種類	字数	比重 (%)
濁音	22	22
鼻濁音	79	78

ここまでの分析を通して、いくつかのことが明らかになった。日本語でガ行条件異音の規範ができる以前に、濁音にしても鼻濁音にしても文節における位置と関係なく読まれたはずである。しかも鼻濁音で読む字が濁音よりはるかに多い。また、呉語だけでなく、古

代の中原の言葉にも [ng -] 音があったはずである。時が経つにつれて、[ng -] 音は普通語では絶滅し、呉語では減少する傾向であり、日本語では条件異音のルールのもとで [g -] 音と [ng -] 音が使い分けられていた。

4. 呉語と日本語の関係及び教育現場への示唆

4.1 呉語と日本語の関係

『万葉集』は呉音で書かれたと言われる¹³。呉語が古代日本語に関与したことは交流史から十分に窺える。五世紀以前の呉語が日本に伝えられたかどうかについては知りようがないし、その時の呉語の形態さえ把握されていない。前書きにも触れたが、日本語にある呉音は5、6世紀に中国の江南から、漢音は7、8世紀に長安あたりから日本へ伝わったという見方はほぼ定説である。しかし、「呉音は由来がはっきりされていないし、日本語的発音をしている」¹⁴とも指摘されているように、呉音がどのようなルートで日本に持ち込まれ、日本語の一部になったのかについてはまだ充分には解明されていない。「中国の南朝から直接に伝えられた可能性と朝鮮半島の百済を経由して伝えられた可能性の二つがあるだろう」¹⁵と推測されている。呉音の語釈について、『日本国語大辞典』では「本来は『和音』と呼ばれ、日本で後に盛行してきた漢音と区別するために名付けられた読書音である」としている。漢和辞典に記されている漢字の呉音は全部ではなく、呉音にもいくつかの読み方があったようだ。例えば、「万」は『新漢和辞典』では呉音「マン」、漢音「バン」と記してあるが、呉語には「メ」に近い音もある。時代によって違った呉音が日本に持ち込まれたと考えられる。中国で古代の漢字音を研究する際、日本語に保存されている呉音や漢音を参考にするのはよく用いられる方法である。だが、日本語の字音も昔から変化してきたことを知っておかなければならない。特に日本語の [g-] は再検討が必要だと思う。「偶」の字は漢音 gou・呉音 gu・慣用音 guu と『新漢和辞典』に記してあるが、現代呉語では鼻音 [ngou] で読むことから、実際日本語のその字の呉音が ngu だった可能性が高い。

日本への呉音の流入時期と推定される5、6世紀は中国では170年間にわたる南北朝で、南朝は建康（現在の南京）を都としていて、『宋書』の中に両国の正式な交流に関する記載が数多くある。ほかに、「紀元4世紀と5世紀の後半、7世紀の中期という三つの時期に大陸から日本へ大勢の移民が渡った」¹⁶と言う。これらの正式な交流や大陸からの移民など呉語が持ち込まれたルートはいくらでもあったようだ。

長安の漢音が日本に流入してからも呉語の影響は途絶えていない。753年に日本に渡り、日本律宗を開いた鑑真は呉の地方の江蘇省揚州の人間である。また、804年、日本の最澄が中国に来て天台宗を習ったところが呉の浙江省にある天台山であった。最澄が日本に帰

って京都の比叡山に延暦寺を建てて日本天台宗を開創した。宋代（紀元 960 年から）以降に伝わった唐音は禪宗などの伝教によって呉の地方から輸入されたものである。このように、呉語は漢音が盛行した時期にも宗教などを通して日本語に関与していたと言える。呉語と日本語の結びつきは歴史の中の一時期でなく、長い間に並行して発展していった言語がその都度の交流をきっかけに交錯し、融合したという複雑な過程であった。

4.2 呉語と日本語の [ng-] 音の比較

以上述べた呉語と日本語の関係史を背景に、ガ行鼻濁音の現状と未来を考える前に、第 2 章と第 3 章で別々に考察した呉語と日本語の [ng-] 音を合わせてその異同を纏めておきたい。

前章で分析したように、日本語のガ行鼻濁音は漢音とも呉音とも関係がある。比較を通して、ガ行条件異音の規則が作られる以前に [ng-] 音が [g-] よりずっと多かったと推測される。呉語で「五」・「午」の中古音は [ngo] だった¹⁷と指摘されているように、「五」・「午」などは本来は、[ngo] だった。いつの間にか、呉語では [ng] に、日本語では [go] になったと考えられる。日本語には「義」・「疑」・「宜」・「蟻」など [ngi] と読む字が非常に多い。呉語には [ng-] 音がたくさんあるが、[ngi] だけはほぼ絶滅の状態である。だが、日本語と同じように「中古音は [ngi] だった」¹⁸のだ。[ngi] は現代呉語では [ni] となっている。今では [ngi] など消失した一部の呉語の原音を日本語から求めることができるのだ。

日本語の [g-] 音の条件異音の現象は呉語を縦横に見てもないようである。さらに、濁音 [gi] は普通語にもなければ、蘇州や上海、杭州など大都会の方言でも消失しているようだが、辺鄙な地方では古代からの発音がまだ残っている。上海から離れた崇明という島や浙江省の天台の方言では第三人称を今も「gi」・「ge」と発音されている。崇明の「gi」の発音は日本語のギと全く同じである。[gi] は三人称単数の一番古い形だ¹⁹と指摘されている。つまり、現代呉語では古代にあった [gi] も絶滅に瀕している。

一方、日本語の [ng-] 音も本来は語頭や語尾と関係がなかったが、条件異音のルールによって、本来、午後 [ngo-ngo] だったであろうものが [go-ngo] になったように、鼻音が濁音になる現象がある。このルールによって鼻濁音で発音する字音は随分少なくなっている。その要因は鼻濁音が難しいからだろうと考えられる。要するに、昔から今日にかけて日本語も呉語も [ng-] 音が衰退している傾向を示している。

4.3 日本語教育への示唆

ガ行鼻濁音の変遷は言語の発展の縮図とも言える。日本語の柔らかさを表わす [ng -] 音は、約千七百年の歴史の流れの中で、漢音が隆盛だった時代を経て、グローバル的に文

化の交錯があった近代二百年を経て、伝えられてきたのだ。今後、廃音になる可能性もある。

ガ行の条件異音が日本の学校教育の内容に含まれなくなったというのは、[ng-]音が日本語から消えようとしていることを意味する。その規則はアナウンサーなどの職業用語ではまだ働いているが、標準語を話すアナウンサー以外の人たちにとっても、ガ行鼻濁音の衰退は物足りなさを感じさせることがあるのではないだろうか。1980年代に大学で日本語の教育を受けた筆者は日本人の先生からカ行・タ行・パ行の有気音と無気音の区別、ガ行の濁音と鼻濁音の区別を厳しくしつけられたのである。二、三十年の間に日本語に大きな変化が起こったのである。

一方、条件異音のルールがガ行鼻濁音を保存するのにも役にたっていると言える。ガ行鼻濁音の重要性和絶滅の危機状態を意識したうえで、教育現場で音声学習の段階でガ行鼻濁音をどう位置づければよいのか、どのように指導したらよいのか考えてみたい。まず、鼻濁音について教科書で触れるべきだと考える。中国で広く使われている三種の教科書を代表として現状を見ると、大学の日本語学科の教科書として知られている『総合日語』²⁰ではガ行の条件異音を厳格に説明しており、世界の日本語教育で使用されている人気の『みんなの日本語』²¹ではその区別をしているものの、「最近、差がなくなり、[ŋ]から[g]になる傾向を示している」と指摘している。第二外国語の学習者向けの『標準日本語』²²では鼻濁音に全然触れていない。即ち、教科書でガ行の条件異音について指導方針が統一されていないのも現状である。

また、発音の難易から言えば、条件鼻音ばかりでなく、筆者の日本語教育の教室で音声段階での教育において撥音「ン」もほとんどの学習者にとって習得が難しい。相当の練習をさせてやっと身につくものだ。ガ行鼻濁音は出身地によって、習得力が違う。呉地から来た学生にとって「ngi」は難しいが、「nga」「ngu」「nge」「ngo」の四つはそれぞれ上海語の「牙 nga」、「我 ngu」、「眼 nge」、「咬 ngo」と同じ発音であると指導すればすぐできる。ナ行とラ行の区別ができない、つまりナ行の音が発音できない四川省や湖南省から来た学生はガ行の鼻濁音も苦手である。訓練してもできない人が多い。それ以外の地方からの学生も練習をすればできるようになる。

ガ行鼻濁音は長い間、日本語の中で活躍し、聴覚的美感を生み出すものとして、保存されてきた。中国における日本語教育の現場では必ずしも日本の学校教育と全く同じ指導方法である必要はなく、本土化があつてしかるべきだと考える。出身地によって人間の発声器官も多少違うようだが、日本でのガ行鼻濁音の教育現状を説明したうえで、日本人以外の学習者の発声条件の差を意識しながら発音の指導をしたらという提案をしたい。教師は

教科書の方針に基づいて指導するため、教科書もガ行の条件異音があったことを明確に記しておくべきだろう。古い呉音や漢音が日本語に保存されているように、自国の事情に合わせて鼻濁音を指導するのも良いだろう。呉の地方の日本語の学習者に対して、数字「二」の発音や、複数の「ら」の発音と意味、助動詞「た」の発音と使い方、及び本稿で考察した [ng-] 音など、日本語と呉語の類似性を指摘しながら日本語を教えるときっと学生たちの理解力をアップさせ、学習意欲を引き出す。

最後に、将来上海語を話せる人が少なくなるかもしれない。住んでいる地方の方言を使いこなせることも一種の実力だから、熱心に子供を英会話の教室に通わせる親たちは地元の方の方言の魅力にも気付くべきであろう。また、日本語において条件異音は古い音を保存し、美しい日本語を話すためにも必要ではないだろうか。

注

¹ 袁家驊 『袁家驊文選』北京大学出版社 2010 年 10 月 p 30

中国語の原文は次のようである。「日语所保存的两种汉语借词，让我们今天多少能够窥见隋唐时期汉语南北语言差别的具体内容。日译吴音借自第五、六世纪的江浙一带的话，日译汉音借自第七、八世纪的西北或长安的话，二者的语音特征的痕迹多少还保存在现代的吴方言和西北方言里」と。本稿で引用した中国語文はすべて筆者が日本語に訳した。

² 藤軍ら編『中日文化交流史』（北京大学出版社 2011 年 1 月）、徐勇ら編『中日文化交流両千年』（社会科学文献出版社 2013 年 2 月）などが挙げられる。

³ 邱従容 『唐朝官話の研究』（原題：『唐朝官話的研究』） 台北南天書局 2008 年 11 月

⁴ 『現代漢語辞典』（中国商務印書館）の客家語についての語釈によると、七大方言の一つで、中古期（紀元 7 世紀—13 世紀）に芽生えた方言で、中原の漢族が各地に移住し、中原の古語を持っていったところを起源とし、主として広東、広西、四川、江西、台湾などに分布しており、中原の古語を保存しているといわれる。

⁵ 矢野光治 「中国漢字音と呉音・漢音—中国漢字文化の奈良時代古典作品への影響」 立正大学人文科学研究所年報 第 46 巻 2009 年 3 月 p 37-58

⁶ 南部智史・朝日祥之・相澤正夫「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について：札幌と富良野の言語調査データを利用して」（国立国語研究所論集 7 2014 年 5 月 p 167-185）や、川上葵「日本語のいわゆる鼻音節子音の実態」（音声学会会報 第 185 巻 1987 年 8 月）、中東靖恵・馬瀬良雄ら「国内・海外の日本語教育におけるガ行鼻音の取り扱い」（岡山大学文学部紀要 第 37 巻 2002 年 7 月 p 127-139）、轟木靖子・河野葉子「放送におけるガ行鼻

-
- 濁音について：アナウンサーの意識調査に基づく考察」（香川大学教育学部研究報告．第 1 部 2004 年 9 月）、李丹蕊「ガ行鼻濁音の発音教育についての考察」（原題：「关于“ガ行”鼻浊音语音教学的思考」 日语学习与研究 2005 年 12 月増刊）などが挙げられる。
- ⁷ 本稿で用いた一部の字例の表記は趙元任『現代呉語的研究』（商務印書館 2011 年 12 月）や、邱從容『唐朝官話的研究』（台北南天書局 2008 年 11 月）、錢乃榮『北部呉語研究』（上海大学出版社 2003 年 5 月）、許宝華編『上海市区方言志』（上海教育出版社 1988 年 11 月）などを参考にした。
- ⁸ 長澤規矩也編『新明解漢和辞典』の付録「漢字について」による。三省堂 1981 年 12 月
- ⁹ 原文は「ng-声母音是汉字语音中最不好发音的部分」（注 3 の『唐朝官話の研究』p282）とある。
- ¹⁰ 注 7 参照
- ¹¹ ロドリゲス著・土井忠生訳『日本大文典』（三省堂 1955 年 3 月 p 620）による。引用文中の「ソンソネーテ」とは土井忠生氏の注によれば「皮肉な言ひ方などに於ける鼻にかかるような抑揚のある発音」であると言う。
- ¹² 轟木靖子・河野葉子 「放送におけるガ行鼻濁音について：アナウンサーの意識調査に基づく考察」 香川大学教育学部研究報告．第 1 部 2004 年 9 月
- ¹³ 小林昭美 『日本語千夜一話－古代編』の第 136 話「万葉集の漢字音・和音と弥生音」 同氏のホームページによる。
- ¹⁴ 原文は「呉音来历不明且帶有日语口音」（注 2 の『中日文化交流史』p 59）とある。
- ¹⁵ 注 2 の『中日文化交流史』p 58
- ¹⁶ 注 2 の『中日文化交流兩千年』p 139
- ¹⁷ 許宝華等編 『上海市区方言志』 上海教育出版社 1988 年 11 月 p 142
- ¹⁸ 許宝華等編 『上海市区方言志』 上海教育出版社 1988 年 11 月 p 129
- ¹⁹ 錢乃榮 『北部呉語研究』 上海大学出版社 2003 年 5 月 p 115
- ²⁰ 彭広陸ら編 『総合日語』 北京大学出版社 2009 年 8 月
- ²¹ 株式会社スリーエーネットワーク編 『みんなの日本語』 外語教学与研究出版社 2009 年 7 月
- ²² 『標準日本語』 中国人民教育出版社 2005 年 4 月